

博士（人間科学）学位論文 概要書

江戸の墓制・葬制の考古学的研究

Archaeological Study of Graves and Burial
Customs in Early Modern City Edo

2010年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

谷川 章雄

Tanigawa, Akio

本論文は、近世都市江戸の墓制・葬制に関する考古学的研究である。ここでは、江戸遺跡の墓地から発掘された埋葬施設などの遺構や、遺体とともに納められた副葬品などの遺物、江戸および周辺村落の墓地に造立された墓標などを主な資料としており、近年盛んになってきた近世考古学の調査成果によっている。江戸の墓制・葬制については、これまで歴史学や民俗学がほとんど関心をはらってこなかったため、いわば空白の領域となっていた。そこに考古学による江戸の墓制・葬制研究の意義のひとつが存在するのである。

江戸の墓制の特徴のひとつは、埋葬施設の構造がバラエティーに富んでいることにある。こうした埋葬施設の構造は、被葬者の身分・階層や墓があった寺院の格式・規模とほぼ対応関係にあった。このような身分・階層の表徴としての江戸の墓制の秩序は、17世紀後葉と18世紀前葉という2つの画期を通じて完成したと考えられる。

江戸の火葬と土葬に関しては、17世紀代の墓地に火葬の割合が比較的高い墓地と低い墓地があり、18世紀以降になると土葬が主体となることが明らかになった。その背景には、江戸の火葬場の廃止・移転があり、儒葬や神葬祭などの影響が想定されるが、同時に土葬であった將軍墓を頂点とする江戸の墓制の秩序へ指向していくことでもあった。

武家故実の礼式に則った將軍家・大名家などの袍衣納めの習俗が、下級武士や下層民などの間に下降し変容して、一般的なかかわりけのみの袍衣埋納遺構が広がるのは、18世紀前葉から中葉である。また、18世紀になると、乳幼児の葬法において火消壺転用棺が用いられるようになった。これは、子供に対するまなざし、母性・父性につながる子育ての観念の大きな変化のなかに位置づけることができるのである。

將軍墓や大名墓の副葬品は、17世紀代には豊富な武器・武具類が多いが、18世紀以降は武器・武具類が少ないか、もたない墓が主体となる。また、18世紀以降になると、身分・階層に拘束される副葬品が認められるようになる。18世紀ごろには、中小寺院の墓の副葬品にも、個人意識を反映した個人の持ち物を副葬する習俗が広がったと考えられる。

江戸の六道銭は、18世紀中葉ごろから出現率が低下し、とくに格式の高い大名墓や高禄旗本の墓、旗本の墓と考えられる甕棺墓ではそれが明確に認められる。その背景には、儒教などにつながる近世的な経済思想の論理が、中世以来の伝統的な死者供養の論理と対立しながら、上層の身分・階層から次第に浸透していった過程をうかがうことができる。

江戸の墓誌は、17世紀代の火葬墓である在銘蔵骨器から、18世紀前葉以降の土葬墓の墓誌に変化していった。そこには、仏教から儒教へという宗教的、思想的な背景の変化があった。墓誌は18世紀後葉以降に幕臣や藩士などにも普及するが、没年月日と姓名など

を記した簡素な墓誌は、被葬者個人の「人格」を示すものとして受容されたものであろう。

江戸初期の墓地は、長い板塔婆などの木製卒塔婆が林立する中に、数少ない石製墓標が点在する景観を呈していたが、18世紀に入ることから石製墓標が増加して、石製墓標によって占められる墓地景観が形成されるようになったと思われる。また、18世紀代になると、木製卒塔婆は一般に忌日供養のために造立されたが、墓標として立てられたものもあった。

江戸および周辺村落の頭部かまぼこ状の墓標から方柱形墓標への変遷とともに、墓標に刻まれる被葬者の数が増加していった。その背景には、中世的な個人の追善供養から近世的な家を単位とした供養へという観念の変化を見ることができる。墓標の全国的な斉一性は、このような死者供養の方式の変化がほぼ18世紀代に行なわれたことを示唆している。

千葉県市原市高滝・養老地区の調査によれば、各家で墓標の造立が広がり、一観面の墓標にかわって多観面の墓標が盛行するようになると、院号居士・大姉など上位の戒名をもてない家では夫婦、兄弟姉妹、親子などをまとめて1基の墓標にまつことが多くなる。これは単なる経済的な理由にとどまらず、強い家意識のあらわれと考えることができる。

近世墓標の普及には、航路や街道などの交通路に沿った都市から村へという地理的要因、地域の経済力、知行旗本の歴史的条件とともに、寺院あるいは寺墓、寺檀制との関連も考慮する必要があるだろう。

以上のように、17世紀後葉、18世紀前葉あるいは中葉にあった江戸の墓制・葬制上の画期の背景には、相互に関連した様々な宗教や思想、観念的背景の変化を読み取ることができるのである。こうした変化は、わが国の近世の墓制・葬制史上、社会史上の一大転換期につながると思われるが、これについては今後の検討を期することにしたい。